

今日も苦吟する

齊藤 征雄

俳句の原点は、何といっても芭蕉である。

芭蕉は「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休の茶における、其貫道する物は一なり」といって俳諧の目指すところを示した。共通するのは「造化にかへれ」つまり自然体であれ、ということをしているらしいが、この中で西行や利休に比べて宗祇は私にとってはなじみが薄い。(造化：自然の法則やその働きの根源を指すことば)

連歌は、五七五の発句と七七の脇句を複数人で交互に詠んでいくものだが、鎌倉から室町時代にかけて大流行した。和歌は貴人のものだったが、連歌は僧侶、武家、さらには庶民にまで広まった。庶民の連歌には、当時流行の一揆の人間結合である「一味神水(連判した起請文を焼いた灰を混ぜた神水のまわし飲み)」に似た、連帯感の高揚を指摘する見解もある。

連歌はもともと機智や滑稽をねらいとする和歌の座興だったが、それを正風連歌として、和歌に準ずるまでに高めたのが宗祇といわれる。応仁の乱の頃、宗祇は東国から九州までを旅した漂泊の人でもあった。そして最後は箱根湯本の旅宿で病に倒れた。

世にふるもさらにしぐれの宿りかな 宗祇

宗祇の代表的な発句である。しぐれ降る一夜の雨宿りははかないが、生き永らえる我が人生そのものが、雨宿りのようなものだ、というような意味だろうか。無常観そのものである。

芭蕉は、次の句を詠んで渋紙に書いて笠に張り付けたという。

世にふるもさらに宗祇の宿りかな 芭蕉

芭蕉は、この句をもって宗祇の本質ととらえた。だから、しぐれを宗祇と言い換えて宗祇を見習おうとしたのであろう。さらに言えば、『おくのほそ道』の冒頭「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。(中略)古人も多く旅に死せるあり」と書いたとき、宗祇を古人の一人に思い浮かべていたのは明らかである。

俳句はむずかしい。一向に芽が出ないので、たまには格調の高い雰囲気にひたればなにがしかの滋養になるのではないかと思ひ俳句の源流を学ぶが、今日も苦吟は続く。